

生きた人間の営みとしての神学：二つの国際学会に参加して

山崎ランサム和彦

はじめに

筆者の所属する学会の中に、アメリカの福音主義神学会（ETS＝The Evangelical Theological Society）と聖書文学学会（SBL＝The Society of Biblical Literature）があるが、これらの二つの学会は毎年11月に年次大会を行っている。昨年この二つの学会に参加する機会が与えられたので、少し前のことになるが、それについてお伝えしたい。

はじめにお断りしておくが、このエッセイは包括的な学会の報告ではないし、学術的なレビューでもない。あくまでも日本からの一参加者の個人的な見聞録として気軽にお読みいただければ幸いである。

ETSとSBLについて

ETSは1949年に創設され、福音主義の信仰に立つ神学者や牧師等から成る学会で、その規模は4,000人ほどである。一方のSBLは1880年に創立された、聖書の学術的研究を目的とする世界最大の学会であり、80を越える国々からの8,500人以上の会員を擁している。ETSでは聖書学に限らず多様な神学的主題が議論されているが、その構成メンバーは福音主義のクリスチャンに限定されている。一方SBLは聖書学専門の学会であるが、参加者の教派的背景、神学的傾向は千差万別であり、信仰者でない学者も多数参加している。このように、この二つの学会はかなり異なる性格を持っているが、興味・関心が重なる部分も多く、筆者のように両方の学会に所属している人々も多い。そのため、例年ではETSとSBLは同じ都市で開催されることが多かったが、2012年はETSはウィスコンシン州ミルウォーキー、SBLはイリノイ州シカゴ、と二箇所での開催となった。

ETSとSBLは単にアメリカの学会であるにとどまらず、世界中の学者が参加する国際的な学術イベントであり、筆者のようにアメリカ国外からの参加者も少なくない。筆者はアメリカ留学時代には学会に参加する機会がなく、はじめてETSとSBLに参加したのは帰国後の2010年に開かれたアトランタ大会であった。今回が2年ぶり2回目の参加となる。今回は友人のY牧師との二人旅となった。

ETSやSBLに参加するには、インターネットを通して事前に参加登録をする（当日の登録もできるが、早期登録者には登録費の割引がある）。学会が近づいてくると、分厚いプログラムが送られて来るので、それらを眺めながら分科会の参加計画を練るのも大きな楽しみである。ETSもSBLも巨大な学会で、多数の分科会が同時並行的に持たれるため、各時間枠の中で自分の最も関心のあるセッションを選んでいく必要がある。興味のあるセッ

セッションが重なってしまって、どちらに出るべきか大いに悩むこともしばしばである。セッション中の出入りは自由なので、時には途中で抜け出して他のセッションに移ることもある。

ETS (ミルウォーキー、11月14-16日)

いよいよ学会前日の11月13日、シカゴのオヘア空港でY師と落ち合い、そこからバスでETS会場のあるミルウォーキーに向かう。ホテルに無事到着してその日は就寝。アメリカでの学会は時差ぼけとの戦いでもあるので、とにかく現地時間に合わせて睡眠を取るように努力するが、結局最後まで時差ぼけにつきまとわれた滞在となった。

ETSで最初に参加したのは解釈学のセッションで、最初の発題者はトリニティ神学校での恩師のひとりでもあるKevin Vanhoozer教授であった。事務局のミスで名札が用意されておらず、ようやく受け取って会場に潜り込むと、入り口近くまで立ち見が出ていた。人気のあるセッションではしばしばこのような状況になる。Vanhoozer教授は聖書の神学的解釈 (TIS=Theological Interpretation of Scripture) という主題について発題された。福音派の聖書解釈のスタンダードである文法的・歴史的的分析は必要条件であるが十分条件ではない。私たち自身が救済史の中で置かれている位置をその中に加味していかなければならない、という内容であった。聖書の神学的解釈は近年の聖書学において注目されている新しい流れであり、Vanhoozer教授は其中で指導的立場を果たしておられる一人であるが、福音派の中での認知度もかなり上がってきている印象を受けた。このように、各発題の内容だけでなく、それらに対する聴衆の反響にも直に触れることができるのは、学会の大きな魅力の一つである。

今回筆者は論文を発表する機会もなかったので、このような調子でいろいろなセッションに気の向くままに顔を出していく。ETSもSBLも巨大な学会であって、一参加者がすべての内容を把握することはもちろん不可能である。さらに、筆者が個人的に参加したセッションについても、紙幅の関係ですべてを紹介することはできない。印象に残った部分のみを簡単に取りあげていきたい。

ETSでは分科会に加えて、年ごとに定められた主題に基づく全体セッションが毎日行われる。前回参加したアトランタ大会では義認論を主題とした全体セッションがなされ、発題者にはN. T. Wrightも含まれていた。筆者もほんの立ち話程度であったがWright博士と個人的に話をする機会が与えられたのは良い思い出である。

2012年のテーマは「被造物のケア (Caring for Creation)」であり、4つの講演があった。中でも筆者の印象に残ったのは、セント・アンドルーズ大学名誉教授のRichard Bauckham博士が行った「我らの時代の生態学的脅威の文脈の中で聖書を読む (Reading the Bible in the Context of the Ecological Threats of our Time)」という講演であった。博士は創世記1章28節 (「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生め

よ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」)を取りあげた。17世紀イギリスの哲学者フランシス・ベーコンは、この箇所に基づき、自らの生活の改善のために被造物世界を征服し、無制限に搾取することが神から人間に与えられた使命であると考えた。Bauckham博士はこれを「創世記1章28節のベーコン的解釈」と呼び、このような思想に基づいて科学技術の力によって人間生活の利益のために自然を無制限に利用しようとする営みを「ベーコン的プロジェクト」と呼んだ。博士によると、創世記1章28節の要点は人間の利益のために地球の資源を搾取することにあるのではない。「地を従えよ」という命令は被造物である人間が与えられた環境で生きる権利を表現しているにすぎない。この箇所の主旨は「支配せよ」すなわち被造物の責任あるケアであり、それこそが神の似姿としての人間に与えられた役割である。ベーコン的プロジェクトはこの核心部分をとらえそこねているため、そこに被造物のケアという概念をただ接ぎ木してもうまくいかない。博士はこのような人間中心主義的、功利的な自然観が今日の大規模な自然化の今日の破壊に繋がっていることを指摘し、今日の生態学的危機においてはこれを根本的に見直して、人類が被造物としての限界を意識して生きていく必要があることを語った。

アメリカの保守的なクリスチャンの中には、環境保護運動に懐疑的な人々も多いが、全体講演の中でこのようなメッセージがなされたことには大きな意義があるように思えた。

SBL (シカゴ、11月16-20日)

11月16日にETSのセッションを早めに切り上げて、ミルウォーキーからシカゴに向かうアムトラックという電車に乗る。車社会のアメリカではあまり鉄道旅行をする機会はないので、貴重な体験となった。シカゴのダウントウンでは、Y師と共に昼食に名物のディープディッシュピザを堪能した。このような現地での食事や風物も海外の学会における楽しみの一つである。

さてSBLであるが、これはアメリカ宗教学会(AAR=American Academy of Religion)と合同で開催される巨大な学会である。2012年の学会は北米最大の総合コンベンションセンターであるマコーミック・プレイスで開催された。これはETSよりもさらに大規模な学会で、参加者も福音的クリスチャンの学者に限らず、さまざまな宗教的(あるいは無宗教的)背景をもつ学者による多種多様なセッションが行われる。もちろん、各発表者の意見に必ずしも同意する必要はないが、様々な背景を持つ学者たちの個性的な学説に触れることは自分自身の神学を深めていく上でたいへん良い刺激となった。

私がSBLで参加したのは「グローバル神学」、「聖書の神学的解釈」、「新約聖書の史実性についての外的確証」、およびいくつかの新刊書の書評セッションであった。TISについてはETSでもセッションがあったが、SBLでは福音派以外の参加者によるさらに幅広いアプローチを知ることができた。さらに、SBL内で行われた聖書研究学会(IBR=The

Institute for Biblical Research) の年次総会にも参加することができた。IBRは福音派の聖書学者で構成されている組織で、今回はアズベリー神学校のBen Witherington教授が新約聖書学における修辞学的重要性について基調講演を行った。

その他の活動

このような国際学会に参加する目的は、単に自分の研究成果を発表したり、他人の発表を聴いたりして、最新の学問の動向に触れるだけにとどまらない。少なくとも他に二つの大きな目的を挙げることができる。

第一は、学術書の新刊を破格の割引価格で購入できることである。ETSでもSBLでも、新刊書の展示場が設けられ、広々としたスペースに所狭しと様々な出版社が出展していた。これらの出版社のブースを巡り歩いて、聖書学や神学の新刊書を見て回るのは、学会参加の大きな楽しみの一つである。ただし、よく計画して購入しないと、ついつい本を買い込みすぎてしまうのが難点である。実際筆者は、前回のアトランタ大会で本を買いすぎてしまい、帰りの飛行機で重量オーバーになってしまうハプニングもあった。

第二に、さらに重要なこととして、さまざまな研究者との出会いがある。特に国際学会の場合は、アメリカのみならず世界の様々な国からの研究者と出会い、意見を交換し、学問的交流を持つことができるのは大きな利点である。

学会期間中は各神学校の同窓会その他の様々なレセプションがあちこちで持たれており、筆者も事前に留学時代の恩師や旧友と連絡を取って待ち合わせ、旧交を温めることができたばかりでなく、新しくたくさんの方にも出会うことができた。今回は友人のY師と同行したおかげで、互いの知人を紹介し合い、一挙に人脈が広がったのは大きな収穫であった。そうしたつながりの中で、海外の学術雑誌や出版物への寄稿依頼などを頂くことも実際に起こってくる。他の参加者も積極的に人脈づくりに励んでおり、博士課程に在籍中の学生が学会中に就職のための面接を受けることもよくあるということであった。

SBLの最終日は、当時執筆していた論文のための調査研究の必要上から、少し離れたシカゴ大学までバスで出向き、そこの巨大な図書館で調べ物をする機会に恵まれた。こうして、充実した学会出席の旅が終わった。

おわりに：国際学会出席の意義

最後に、ETSやSBLのような国際学会に参加する意義について、筆者なりに感じたことをまとめてみたい。海外での学会参加は、多くの時間と費用を要する一大イベントである。実際筆者も渡航費を含め参加費用は個人負担であるため、毎年参加することは現実的に難しい。インターネットの普及により、日本国内にいても、海外の学問的動向については一昔前では考えられないほど素早く簡単に情報を入手することができるようになった。洋書も通販を通して、比較的安価かつ迅速に手にすることができる。では、たいへんな時間と

費用をかけて海外の学会に出席する意義はどこにあるのだろうか？

確かに今日では日本に居ながらにして、かなりの程度の学術的情報は手に入る。しかし、実際に学会に参加するならば、最新の研究成果を研究者自身の口から聞くことができるだけでなく、他の第一線の学者たちによる白熱した議論にも触れ、さらに時にはそれらの学者と直に会って話を聞くことができるなど、ネットや書籍だけでは触れることのできない生き生きとした学問のうねりを感じることができる。そのような体験を通して受ける刺激や啓発は、紙やディスプレイ上の情報では決して得ることのできないものである。

結局のところ、神学は単なる紙の上の観念の連なりではない。それぞれの神学あるいは神学書の背後には、ひとりの生きた「神学者」がいる。そのような生きた人間の営みとしての神学、特に信仰者である神学者にとっては、生ける神ご自身とそのみ業を知ることを切に求める信仰の業（*fides quaerens intellectum*）としての神学という側面を忘れてはならないと思う。生きた人間の営みとしての神学の重要性を改めて確認する機会となった、今回の学会参加であった。

ちなみに、2013年のETSとSBLはどちらもメリーランド州ボルチモアで開催される予定である。筆者が参加できるかどうかは未定であるが、日本からも多くの参加者がいることを願っている。

（リバイバル聖書神学校校長）

